

# 平成17年度病害虫発生予報第7号

平成17年8月25日  
鳥取県病害虫防除所

## 予報の概要 [参考]

区 分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち) 紋枯病 トビイロウンカ 斑点米カメムシ類	- - - -	少 ない 多 ない 平 年 並 多 ない
	ダイズ	紫斑病 ハスモンヨトウ カメムシ類	やや早い やや早い -	平 年 並 多 ない やや多い
果 樹	ナシ	シンクイムシ類	平 年 並	やや多い
野 菜	トマト・ミニトマト キャベツ・イチゴ	ハスモンヨトウ	平 年 並	多 ない
	ネギ・ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並

## 気象予報(抜粋)

1か月予報(8月20日~9月19日:8月19日、広島地方気象台発表)  
向こう1か月の気温は高く、降水量と日照時間は平年並でしょう。

<可能性の大きな気温経過>

期 間	平均気温
8月20日 ~ 26日	高 い
8月27日 ~ 9月2日	平年並か高い
9月3日 ~ 16日	平年並か高い

## 普通作物

### [イネ]

#### 1 いもち病(穂いもち)

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 少 ない

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、葉いもちの発生は県下全域で見られているが、発生ほ場率は11.2%(平年:41.3%)で、平年に比較して少ない発生である。

イ 梅雨明け以降の好天により、全般に葉いもちの病斑進展は緩慢となっており、穂いもちの発生は少ないと思われる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

中生品種、遅植等で出穂期~穂揃い期を迎えている地域では、出穂前後の防除を徹底する。

## 2 紋枯病

### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 多い

### (2) 予報の根拠

- ア 8月2日現在、発生ほ場率は65.6%（平年：34.6%）と多い発生となっている。
- イ 8月中旬現在、病斑の進展が止まっていないほ場が県下全域で多くみられている。本年は特に病斑高率が高く、中には病斑高が50cm程度のほ場も散見されている。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本病発生に好適である。

### (3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第1号（7月28日付）を参照し、病斑の進展が止まっていないほ場（目安：病斑高30～35cm以上）では、出穂後であっても防除を行う。

## 3 トビイロウンカ

### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域（特に沿岸部）  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

7月下旬現在、県下全域で予察灯への誘殺が確認されている。また、一部ほ場においても、発生が確認されている。

### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、防除が必要なほ場は認められていないが、ほ場間差が大きいいためほ場の生息密度には注意する。
- イ 防除の目安は8月下旬以降では、1株当たり10頭以上とする。

## 4 斑点米カメムシ類

### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 多い

### (2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、ほ場及びイネ科雑草地での発生は、平年よりやや多い。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本虫のイネへの加害には好適なものと見込まれる。

### (3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第2号（平成17年8月1日付）を参照のこと。

## [ダイズ]

### 1 紫斑病

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 やや早い  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 大豆の開花期は平年より2～3日程度早くなっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

防除に水和剤を用いる場合は、アミスター20フロアブルの3,000倍液に、カメムシ類の防除剤および展着剤を加用し、開花期の25~30日後に1回、150~300g/10aを散布する。粉剤を用いる場合は、マネージトレボン粉剤DLで開花期の25~30日後に1回散布する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い  
発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップによる誘殺数はやや多く、8月下旬以降、幼虫の被害が増加すると予想される。

イ ダイズほ場での発生は平年よりやや早い7月下旬頃から確認された。

ウ 8月23日現在、発生ほ場率は90.0%(平年:76.7%)、平均白変葉か所数は2.6(平年:1.1)と多い発生となっている。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量と日照時間は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除の目安は、1a当たりの白変か所数が3~5か所とする。発生初期の場合、葉の切除などの捕殺を行うか、カルホス粉剤、トレボン粉剤DLなどでスポット散布を行う。なお、白変葉の観察に当たっては、ほ場脇からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。

イ 幼虫は齢期が進むと防除効果が劣るため防除適期を失しないようにする。現在、若~中齢幼虫の発生が主体であるが、老齢幼虫が混在しているほ場も散見されるので注意が必要である。

中~老齢幼虫が混在する場合はロムダン粉剤DL、老齢幼虫が多くなった場合はランネート45水和剤の1,000~2,000倍液、またはラービフロアブル1,000倍液などを散布する。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月22日現在、本ほではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシなどの発生がみられ、発生ほ場率は51.3%(平年:32.2%)、25株当たり平均成幼虫数は1.5頭(平年:0.7頭)とやや多い発生となっている。

イ 8月中旬現在、予察灯における誘殺数は平年に比べてやや多い。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されており、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近年、9月以降にカメムシ類の密度が急増する傾向がみられるので、今後の発生状況に十分に注意する。

イ 防除指針に従い、若莢期にあたる開花期の25~30日後と、その10日後に薬剤を散布する。その後も発生が多い場合、幼虫の密度が再び増加する9月上中旬頃に追加防除を行う。

## 果 樹

### 【ナ シ】

#### 1 シンクイムシ類

##### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数は多く、モモシンクイガの誘殺数はほぼ平年並である。

イ 現地の一部のナシ園では、ナシヒメシンクイによる果実被害が認められている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されており、ナシヒメシンクイの第4回成虫の発生最盛期は平年並の8月下旬頃と見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 豊水などの無袋栽培園では、9月までに防除を行う。

イ 薬剤は少発生園ではDDVP乳剤50の1,000倍液(使用時期:収穫7日前まで)などを、多発生園ではアグロスリン水和剤2,000倍液(使用時期:収穫前日まで)などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

ウ 受粉樹に残っている果実はシンクイムシ類の発生源となるので直ちに除去する。

## 野 菜

### 【トマト、ミニトマト、キャベツ、ブロッコリー、イチゴ】

#### 1 ハスモンヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 平 年 並

発生量 多 い

##### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場(東伯郡大栄町)におけるフェロモントラップの誘殺虫数および幼虫による食害量は平年並である。

イ 現地ほ場におけるフェロモントラップの誘殺虫数は多く、一部、幼虫による被害の多いほ場が見受けられる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量と日照時間は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う必要があるため、ほ場内を観察し、発生がみられた場合には直ちに防除を行う。

イ トマトの防除薬剤は、若齢幼虫期に、アタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液およびノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。若齢幼虫、中~老齢幼虫が混在する場合にはトルネードフロアブル2,000倍液などを使用する。

- ウ ミニトマトの防除薬剤は、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーマルト乳剤2,000倍液およびデルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。
- エ キャベツの防除薬剤は、若齢幼虫期に、アタブロン乳剤2,000倍液、ラービン水和剤75の1,000倍液およびデルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。若齢幼虫、中～老齢幼虫が混在する場合には、コテツフロアブル2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを使用する。
- オ ブロccoliの防除薬剤は、PAP乳剤（エルサン、パプチオン）の1,000倍液、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。
- カ イチゴの苗床における防除薬剤は、若齢幼虫期には、アタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液およびラービフロアブル1,000倍液などを散布する。若齢幼虫、中～老齢幼虫が混在する場合には、コテツフロアブル2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液およびアフーム乳剤2,000倍液などを使用する。

## [ネギ、ナガイモ]

### 1 シロイチモジヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域（沿岸部中心）
発生時期	平年並
発生量	平年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップの誘殺虫数は、平年に比べてやや少ない。
- イ 県予察ほ場（東伯郡大栄町）のネギ、及び現地のナガイモほ場における被害は平年に比べてやや少ない。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量と日照時間は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月下旬～9月上旬が、若～中齢幼虫の発生盛期になると予想されるため、この時期を重点に防除を行う。
- イ 若齢幼虫の時期が防除適期である。これを逃すと防除が極めて困難となる。
- ウ ネギの防除薬剤は、コテツフロアブル2,000倍液、ランネート45DFの1,000倍液、アフーム乳剤2,000倍液などを散布する。多発圃場ではアタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤2,000倍液などを用いて、5～7日間隔で2回程度散布する。
- エ ナガイモの防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を用いて、5～7日間隔で2回程度防除を行う。

## [おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。  
詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.acis.go.jp/> )

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守しましょう。**

### < 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : [byogaichu@pref.tottori.jp](mailto:byogaichu@pref.tottori.jp) 又は [kttr0301@sp.jppn.ne.jp](mailto:kttr0301@sp.jppn.ne.jp)

次回の予報発表は、9月8日(木)の予定です。